

三法の必然 ―― 聖徳太子の国家理念

安齋 玖仁

三法とは神道、仏教、儒教をいう。法はノリと訓読みするように則、そして道という意味をもつ。道とは生きかたである。

神道はわが国古来の神の道である五鎮三才であり、仏教と儒教はそれぞれ興った国における神の道である。風土と国柄による違いはあるが、古く元を辿れば三法は一つにつながっている。一つとは神そのものである。

仏・儒の二法は時代を経て広く伝わっていくうちに元から離れ、枝道が増え、派が生まれた。派は人が作ったものであり、神は関わりない。道は本筋から外れず極めなければ元は見えず、神を覚えることはできない。枝葉と花にとられる者は、己の道のみ

が道であると錯誤し他を排除しようと名分を立て競いあい争う。それが本末転倒であることに気づきようがないほどに、人は枝道を細かく作ってきた。根本の教えに人が順ずるのではなく都合や実利に合わせた解釈を用いるようになったのである。時代のせいではなく、人が心を見失ってきたからである。

わが国の神の道は古来、祭祀と口伝によって保たれてきたが五鎮三才は儒教、仏教と異なり言葉ではなく神のはたらきを覚るのみである。儒と仏の教えは人の行い、行に直結する。そして神道は神のはたらきの結果である恵みを言祝ぎ、また人の行いを伺い奉ることである。この三つが偏りなく組み合わされれば人は善なる方へ行くことができる。だが、一法に偏れば、仏は情に寄り、儒は理屈に寄り、神は見えず、脇道へ逸れ善なる結果へ至るのは難しい。神の意味を理解する者は朝廷においても次第に減ってきた七世紀、聖徳太子は人口が増え世の中が変わる向後を見通された上で、三法普及の必要性を推古天皇に奏上された。そして勅により、神の道を

神教経と宗徳経に著された。加えてすでに彼の国で世の中に普及している儒教と仏教を方便として人々の教化に用いられた。

国家を末永く安寧に保つには人々の手本になるべく官吏がまず道を修め、公正な行政になるようにしなければならぬ。そのため政治家憲法を定め、三法については儒士憲法、神職憲法、釈氏憲法として聖徳五憲法に運用が定められた。通蒙憲法に総論が述べられ、それぞれが果たすべき目的と役割が明記され、他の領分を侵さないように戒められた。

しかし聖徳太子が薨去された後は、推古朝ではかろうじて保たれたものの、やがて朝廷へ仏教が浸潤し、儒教もまた律令制下の官僚機構を支える柱となり、聖徳太子の描いた理想とは遠く及ばない国家となった。五憲法の多くは破戒され聖徳太子の憂いは現実のものとなったのである。

国家は天皇が続べる社会であっても、武家がそれに代わったにしても、結局のところ人が治める。そして善い政（まつりごと）を行うには人の道を修めね

ばならないことに変わりはない。特に天皇の役割は五鎮道にある。それは権威ではなく（当然だがあえていえば）実体のともなった齊元道でなくてはならないわけで、神道をおろそかにし仏教に帰依しては社稷を護ることはできない。

先代旧事本紀大成経に説かれている「五常五行」は聖徳太子が三法を凝縮して示された人の道の修法である。その要は「私を滅す」にあり、儒、仏においても「無私」は当然の原則である。仏教の百の煩惱を無くし執着を離れること然り、儒教の礼楽然り、我欲を退け心の和らぎを保ち神の恵みをその身に実感すること然り、それが己自身と周囲を調和させることにつながり、人の道を歩む基本である。

源宗先生は三法を兼ね備える道を理解しやすいように一本の樹に喩えられている。根は神道、幹は儒教、枝葉と果実は仏教を表すこの樹は一個の人である。人の人生は根から始まり、すつくと立ち社会の道理を学んで幹が伸び、その幹に根から昇る命の滋養が蓄えられて枝葉を茂らせる。そしていかなる

人生であれ枝葉と花はやがて枯れ落ちる。いかに枯れるか、仏教はその行方を教えてくれる。命あるものすべてを尊び、等しく終わりがあること、その廻りはやがて根のあるところへ還る。この内なる樹を大切に育てるのが人の道の「五常五行」を修めることである。

仏教は本来無一物の平穏と無に帰すことを説いたものであるが、時代が降るとともに輪廻転生やご利益信仰が盛んになった。これは八世紀頃から怨霊鎮めを請われて宮廷に浸透した仏教が、人がどこから生まれどこへ去るのかを誤って説き、やがて中世になると生老病苦から逃れたい人の情を来世信仰という即物的かつ現実逃避へ誘ったことに起因する。方便を用いて教えを説くのが高じ、怪奇によって懼れを煽るのは邪道となる。やがて政治権力と結託した仏教組織は所帯が大きくなるにつれ衆生済度の本義を失い、蓄財し、僧が武装化するまでに至った。本来、寺社が国家の庇護を受けるのは無一物で権力を持たないことが原則であったはずが本末

転倒となったのである。これらの経過は聖徳太子の預言どおりであり釈迦の教えと異なる邪道へ堕ちたといえる。また、それを戒めた仏者が排斥された歴史はあまり知られていない。

神道の五鎮道では、肉体から離れた魂は神の道へと昇華し、性（うまれどころ）へ還る道を教えている。その道を行く者は生まれの貴賤に関わりなく、みな平等に生まれどころである眞洞へと至れる。

だが五鎮道は埋もれ、人々は迷い死を恐れ、仏教の説く来世でもなく、目の前にある今に執着するようになった。救世救民が悲願であるはずの仏教では三宝（仏法僧）を尊び、聖徳太子の御心を知る由もない。一法に偏るあまり三法みなが形骸化した今日、人心は荒廃していくばかりだ。

しかし今一度、元の道へ戻るべく学び、伝えあつていくしかない。それぞれの法の真髄を掴んだとき、神を実感することができる。